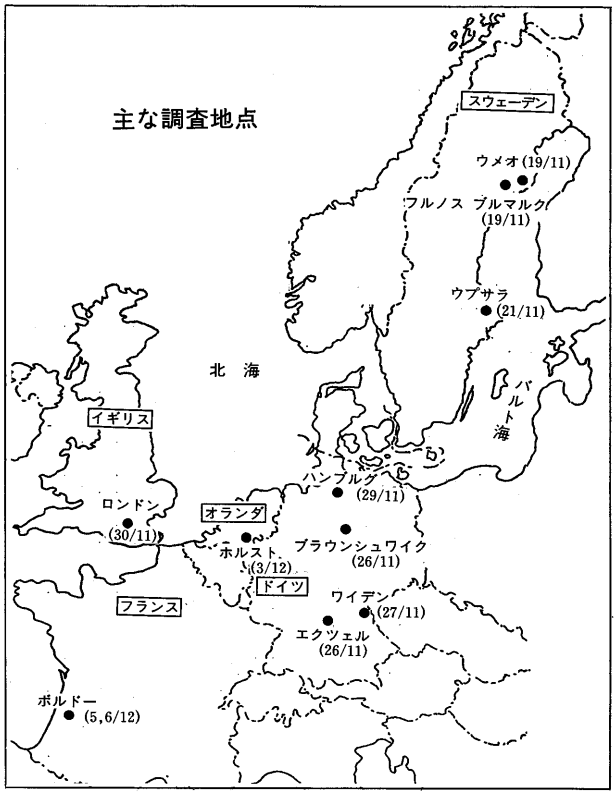
ヨーロッパみてある記
―西洋きのこ事情―
（その1）

瀧　澤　南海雄

○登場する人々
- 北海道立林産試験場
  利用部微生物利用料
  瀧　澤　南海雄
- 北海道立滝川畜産試験場
  研究部畜産資源開発科
  山　川　政　明
- 滋賀県立農業短期大学
  鈴　木　雄　一
- その他，大勢の人々

○歩いたところ
- スウェーデン：ウメオ，フルノスブルマルク，ストックホルム，ウプサラ
- ドイツ　　：ハンブルグ，エクツェル，ブラウンシュワイク，ワイデン，ニュルンベルグ
- イギリス　　：ロンドン
- オランダ　　：アムステルダム，ホルスト
- フランス　　：ボルドー，パリ



ことの発端

私の料と山川氏の科では，稲わらをキノコ菌糸で改質して反芻(はんすう)動物の飼料に変える研究を，昭和63年度から共同で行っていた。そこへ，運が良いことに，平成2年度から企画振興部が「海外技術導入促進事業」を開始した。これは，異なる分野の研究者が2人1組になって，海外の研究機関を調査して，先端技術の導入を図ることを目的としたもので，年間2組が海外調査旅行を行うこととなっている。

この事業の発足を知ったことから，共同研究の打ち合わせの時に冗談として「一応手を挙げてみましょうか」と，畜産資源開発科の岡本科長に口を滑らしたのが発端となった。畜試側は真面目に受け取って，「やりましょう」ということになってしまった。

旅行の目的は，木材や稲わらなど，繊維質資源の微生物分解技術に関する研究蓄積の多いヨーロッパの研究機関を訪ね，ヨーロッパで盛んになりつつあるヒラタケ，シイタケの栽培技術や菌株を知り，廃培地の利用技術を含めた研究動向を調査して，本道におけるキノコ栽培並びに畜産資源の開発研究を推進するための資料を得ること，となった。

それからは，訪問する研究所を選び，住所を調べ，そこでは何を調査するか，予算は幾らか，などなど，大忙しの書類作りに追われ，申し込みを行ったのがジャスト締切日であった。その後も書類の不備を直し，企画振興部の面接調査をうけ，最終的な旅費の計算をし，やっと決定をみて，現地との打ち合わせに入った。出発間際まで，訪問を受諾する返事がこない所もあって，やきもきしたが，なんとか全部の研究所と連絡がついて，旅行社へ航空券とホテルの予約を発注する運びとなった。

ところで，同じ時期に，林産試験場ではキノコ室の設立問題が生じ，私は科員共々このための打ち合わせと書類作りに１日中追われていて，しかもほとんど毎夜9時，10時の帰宅が続いていた。そこで，旅行社との折衝はすべて山川さんにお任せし，私はキノコ室の業務に専念させて頂いた。今回の調査旅行がつつがなく実行できたのは，山川さんと後から登場する鈴木さんのお陰なのである。

さて，これから始まるお話は，48歳にして初めて海外に出た，まったくの「お上りさん」の体験記であります。

出発

平成2年11月17日

とうとう出発の日がきた。このところキノコ室の建物の設計や予算案作成のために，連日朝から夜遅くまで仕事に追われていて，旅行の準備その他，全く手付かずに近い状態で過ごしてきた。なにしろ11月17日の出発というのに11月1日までパスポートの手続きに行けなかった。受取り日が14日だと言われて驚いたほどせっぱ詰まった準備ぶりで，英会話の訓練をするゆとりなんか全く持てなかった。旅行に持っていく荷物の整理も，昨夜9時過ぎに帰宅してからやったのだ。

朝，女房に見送られてタクシーに乗り，駅に向かう。連日の疲れ（とくにワープロによる）で後頭部がガンガンして，思考力が正常時の10％程度しか残っていない感じ。このままの状態で海外に行って，果たして十分な成果が得られるかどうか不安になる。

10時30分発のライラックに乗る。途中滝川で乗ってきた山川さんが席まで来て，航空切符の束，ユーレイルパス，ヨーロッパの列車時刻表などが入った袋を渡してくれる。私が仕事で忙しくて旅行社との打ち合わせなどをする余裕がなかったので，山川さんに全てをおっかぶせる形でお任せしていたのだ。山川さん，ありがとう。

千歳空港の食堂でビールで乾杯しながら昼食をとる。

14時35分発のＪＡＬで成田へ直行。成田で５時間を過ごすことになる。とりあえずロビーの長いすに座って時間つぶし。旅行社がくれた袋の中に海外旅行の手引書と「ポケット通訳」なる6か国語の対訳文例集があったので，これを読む。ところが，簡単な日本語を読んでそれに対応する英語を考えるのだが，全く頭に浮かんで来ない。しょうがなく対応する英文を読むと，ああそうだったなと納得するのだが，次の文例に進むとまた同じである。どうもこの１か月余りの間に，脳みそと体力を酷使し過ぎて，疲労の極致にあるようだ。もっとも英語に関してはもともと実力不足ではあるのだが。

「山川さん。エライこった。全然英語が浮かんでこないよ」と言うと「ソリャ困りますよ，瀧澤さん。僕は瀧澤さんの英語力だけが頼りなんですから」との返事。彼はこれまでも，英会話はまったく駄目，と自称してきている。

しばらく時間をつぶしてから出国手続きをとる。いよいよ外国に一歩踏み入れるのだ。中に入るとさすがに外国人の姿が多い。免税店をのぞき，軽

い夕食としてうどんをすすり，いよいよ搭乗手続きをする。我々の乗るスカンジナビア航空の搭乗窓口を監督していた親切な中年男性が，エコノミークラスの切符を持った我々にビジネスクラスの席を割り振ってくれた。ありがとう。お陰で酒がただで飲み放題になったのだ。

21時37分，我々の乗ったスカンジナビア航空980便は成田空港を離陸した。22時40分に夕食がでる。

メニューと食べた感想は次のとおり。

鮭の燻製	油がのってうまい
卵のムース詰め	可
アスパラガス	苦い，最低
ヒラメのワイン蒸し	塩が強すぎる
ピーマン入りライス	ベタベタ
チーズ盛り合わせ	良
サラダ	不可
ブラックフォレストケーキ	可
コーヒー	単なる煮出し汁
ワイン（ボルドー，白）	ドライでうまかった。

24時ちょうどから映画「Short Time」が始まる。

機内でサービスをしている中で，スウェーデン人のスチュワーデスは年増で愛想がない。一人混じっていた日本人のスチュワーデスは若くて愛想もあるが美人ではない（ゴメンナサイ）。飛行機の中は日本人の数も多く，スウェーデン語，英語の放送の後には必ず日本語の放送が続き，映画も日本語のチャンネルがある。スウェーデン人のスチュワーデスやスチュワードも「お茶ー，お茶ー」と叫んでサービスにこれ勤めるなど，まだ海外に出たという気分にはほど遠い。山川さんはぐっすり眠っている。私はせっせとアルコールを体に入れるのだが，もともと体を横にしなければ寝つけない体質なので，眠れず。頭はいよいよ重い。

飛行機は平均時速1,000km，高度9,500mで順調に飛び続け，11月17日 AM 9：11のアンカレッジに着いた。結局，5時間34分飛んでいる間に12時間26分も時間を逆行したことになる。

写真1　アンカレッジ空港ロビーに立つ山川さん

アンカレッジは暗く，遠くにライトをつけた車が行き交っているのが見えた。気温－7℃，雪。

ところで，アンカレッジ空港は日本そのもののようであった。売店の看板や案内板はすべて日本語入り。売り子（おばさんばかり）も日本語で商売上手だし，マフラーやカメラの忘れ物の案内も，すべて日本語のみの放送だ。「名代　うどん」の暖簾（のれん）も下がっている。

とにかく眠い。しかし眠れる場所はない。空港ロビーの椅子にもたれてみると，窓の向こうには荒涼とした風景が続き，その中に雪をかぶったセスナ機が列を作って翼を休めていた。

11時49分，飛行機はアンカレッジ空港を出発。飛び立って直ぐ食事が出たが，断る。椅子に座ったままで食事をまともにとっていたのでは，カロリーの取り過ぎだし，第一腹が空かない。

眠いけど眠れない。頭は重い。「お茶ー，お茶ー」と叫びながらスチュワーデスやスチュワードが行き来する。

11月18日

4時30分に朝食が出て，5時56分（日本時間13時56分）にコペンハーゲンに着陸した。コペンハーゲンで2時間過ごし，7時40分，小さな飛行機（バイキング号）は暗い中を離陸した。この飛行機にはアンカレッジからコペンハーゲンまでの飛行機のクルーが乗り込んできた。きっとストックホルムにマイホームがあるのだろう。

ところで，この飛行機から日本人は我々2人だ

けになった。日本語の機内放送もなくなった。いよいよ自分たちが外人になったのだ。

7時45分，右の窓からサァーツと光が差し込んだ。ヨーロッパで見るはじめての日の出だ。右の窓からは，周囲の雲を金色に輝かせながら太陽が昇って来るのが見えた。また，左窓から下をのぞくと，雲の波が広がっていて，その中で高く盛り上がった部分の先端だけが茜色に染まっていた。

軽い朝食の後，飛行機は8時40分にストックホルムに着陸。

入国手続きはパスポートの提示だけ。質問もない。税関も「申告するものを持たない人」の表示があるゲートを自分で選んで通れば，係官はただ見ているだけである。初めての海外旅行で緊張していた我が身は，余りにも簡単で拍子抜けする。

ストソクホルム国際空港のインフォメーションでウメオ行きの飛行機の搭乗窓口を尋ねると，ウメオ行きは国内線だから黄色のバスに乗って１番の建物へ行けと言う。これが初めての英会話である。多少の緊張と，疲れ（なにしろ寝ていない）のせいで，１番と聞いたにもかかわらず，頭の中には２番と残ってしまい，バスで２番へ。結局200mほど歩いて１番に戻る羽目になる。山川さん，申しわけない。戻る道々，所々に機関銃を持った兵士がたむろしているのを見掛けた。よほどの要人が空港を利用するのだろうか。それとも日常的に警戒しているのだろうか。気になるところであった。

１番の建物に戻ってからも失敗が一つ。ある窓口で何人かが手続きらしいことをしているので，そこが搭乗手続きをする窓口と思い込んで後ろに立っていた。ところがしばらくすると，一人の男が番号を打った紙切れを持って来て，これに名前を書いて窓口に出せと言う。何の事はない，我々が並んでいたのは予約窓口だったのだ。改めて構内を見渡すと，搭乗手続きの窓口は別にあった。二つ目のチョンボだ。

手続きを終え，待合室で出発を待つ間にトイレへ行ったところ，小便器の形が減茶苦茶に面白いので写真に撮る。まるで小さな洗面台が並んでいるみたいなのだ。横には目隠しがなく，隣同志隠しようがない。しかも便器の位置が高いので，背の低い人は背伸びをしなければ届かないのではないか，と心配なほど。幸い，他に誰もいなかったので，「歌麻呂は誇張が過ぎる」などと，外国人に気付かれることなく小用を済ませることができた。戻って山川さんに便器のことを伝えたら，彼はビデオカメラを持ってすっ飛んで行ってしまった。

ウメオ到着

11時40分離陸，11時30分ウメオに着陸。雪が降っていた。空港の建物への入り口で立ち止まり，後ろ向きになって飛行機の写真を撮っていたら，後ろから「貴方が瀧澤さんですか？」と声が掛かった。「そうです」と答えながら振り返ると「エリザベスよ」と手を差し延べながら笑みを浮かべた小柄な女性が立っていた。

写真2　ストックホルム空港のトイレ

写真3　ウメオ空港

写真4　ホテルからのながめ

写真5　ウメオの町並

握手をしながらあいさつの言葉を交わす。彼女はスウェーデン農業科学大学（ウプサラ市にある）の分場の一つ，北方スウェーデン園芸試験場（ウメオ市にある）でキノコ栽培の研究を担当しているボート夫人であった。彼女は日曜日だというのに，わぎわぎ空港からホテルまで我々を案内するために車（トヨタ車）で出迎えてくれたのだ。

雪道のスタートでタイヤがわずかにスリップすると「ご免なさいね，運転が下手で。安全運転でゆっくり行きますから」などと細やかな気遣い。「今日の午後の予定は？　どこか見て回りたい所がありますか？」と尋ねるので「35時間以上寝ずに旅してきたので，直ぐホテルで休みたいんです」と答える。彼女はホテルへ我々を案内すると「明朝8時に迎えにきます」といって帰って行った。

ホテルの部屋は広く，ベッドもセミダブルが二つあるツインルーム。バス・トイレ，応接コーナー付きの豪華版。窓から見ると，町中に大きな川があって，無数の板状の氷が川面を流れているのが見える。流氷だ。おまけに12時だというのに太陽の位置が異常に低い。やはりここは北極圏なんだ，と改めて実感する。

山川さんは元気で，「すこし街を歩きたい」と言う。昼食の前に一運動することにして街に出る。自分の足で歩く初めての外国の街は，とても奇麗で清潔だった。デパートを見付けて入り，書籍部でキノコ図鑑を３冊買ってホテルに帰る。

13時30分にホテル地下にあるレストランに行く。中年のやせたおばさんがメニューを持ってくるが，スウェーデン語で書いてあるので読めない。「読めないので，軽いものを選んで欲しい」と頼んだら，困った顔をしてどこかへ行ってしまった。程なく太った中年のおばさんが来て「何かご用でしょうか？」と言う。やせたおばさんは英語が分からなかったのだ。外国のホテルにも英語の分からない従業員がいる（考えてみれば，当たりまえだが）ことで，英語コンプレックスが多少和らぐ。改めて，長旅で疲れているので軽いものを選んで欲しい，と伝えると，子牛のフィレステーキが良いでしょう，と言う。次にビールはあるかと聞くと，２種類（ストロングビールとソフトビール）あると言う。ストロングビールを注文すると，500mlのタンブラーで届けられた。赤ピーマンとキャベツのサラダが突き出しだ。

肉は焼き過ぎ（ウェルダンをとおり越している）で固く，添えられていた大きな馬鈴薯は水っぽい。しかし，ビールはうまかった。お代わりをして2杯飲み干し，部屋へ帰って風呂に入って洗濯。次いで旭川へ電話を掛けて無事到着を報告。

17時半にベッドへ入り，そのまま晩飯も食べずに沈没してしまった。

（つづく）

（林産試験場　微生物利用科）